

黃石公園遊覽記

松 山 基 範

公園開きを待ち兼ねるやうにして黃石公園 (Yellowstone Park) に向つた。例年の通り六月二十日に開かれて九月十五日に閉ぢるのである。

黃石公園はワイオミン (Wyoming) 洲の西北隅にあつて、北はモンタナ (Montana) 洲に西はイダホ (Idaho) 洲に少しく跨り、南北六十二哩東西五十四哩を矩形なりに仕切つて國營公園としたのである。丁度ロッキー山脈が北北西から來て少しく方向をかへ、一方にはウオサッチ (Wasatch) 山脈が別れて出る所に當つて居る。全體の地形は海拔八千尺の高臺を主要部とし、周圍殊に東北二方面には一萬尺を越える高峯が連つて居る。園の中央南寄りに周圍百哩餘の黃石湖 (Yellowstone L.) があつて其湖面は海拔七千七百尺を越えて居る。之から出る水は北に流れて黃石河峽谷 (Yellowstone River Canyon) を作つて居る。此下流は公園を北に出て後東廻してミズリー河 (Missouri R.) に合し南廻して遂にメキシコ灣に注ぐ。黃石湖の西南にはショウション湖 (Shoshone L.) だのルウイス (Lewis L.) 湖だのがあつて、其水は南に流れて蛇河 (Snake R.) となり西廻北折遂にコロンビヤ河

(Columbia R.) に合して西方太平洋に注ぐ。即ち此間に偉大なる分水嶺が存在するのである。園内西部の水は合してマヂソン河 (Madison R.) となつて西境を出で、北廻してミズリー河の上流に合する。

此の地形を完成したのは今日尙温泉として餘勢を示して居る所の火山作用である。東部及北部の連峯には片麻岩及び古生層の砂岩石灰岩等を見るのであるが、何れも白堊紀の終りに盛んであつた造山力の爲めに隆起したのである。此の爲めに公園の中央部は廣漠なる盆地として残された。第三紀に入つて噴火作用が盛んになり、北部ではウォッシュバーアン山 (Mt. Washburn) 南部ではセリダン山 (Mt. Sheridan) を中心とし至る所から多量の熔岩を流し岩屑を飛ばして盆地を埋め其厚さは二千尺に及び茲に廣漠なる高臺を作つた。此の噴火は十數回に渡つたもので、園内北部のアメシスト山 (Mt. Amethyst) の東北の懸崖には噴火休止の間に生育した森林が噴火毎に埋められて出来た化石林十三層を數へる事が出来るのである。氷河期には全部氷河に被はれた痕跡が残つて居て、黃石河の西岸の林の中には其邊にない花崗岩の大塊が其證據として淋しく残つて居る。噴火作用は止んだが高臺の熔岩層は至る所高熱水蒸汽の爲めに變化し、流水は之に添ふて浸蝕を逞ふして今日の黃石河及ギッボン河 (Gibbon R.) 等の峽谷を作つた。今日尙火山作用の名残として残つて居るのは園内殆んど至る所に見る噴泉である。其特に著しいものは園内西寄りに並んで居て、北入口に近く巨象



10 0 10 20 30 Km

黃石公園圖

温泉 (Mamm-
oth Hot Spril-
ngs) があり、
中央北寄りに
はノウリス泉
窪 (Norris Ge-
yser Basin) 南
寄りには下の
泉窪 (Lower
Geyser Basin)
及び上の泉窪
(Upper Grey-
ser Basin) 等
である。第一
のものは炭酸

泉であつて其溶解物の沈澱して作つた高さ二百尺の湯華段丘は實に最も巧なる彫刻家と雖ども及ばざるべき形と色彩とを有する天下の美觀である。其他は硅酸泉であつて無數の間歇泉を作り、其内の一つ一つでも尙地球上の他の總てのものを合したよりも大きいといふ誇りを持つて居るのである。

黄石公園の入口は四方にあるが、普通は北太平洋鐵道(Northern Pacific R. W.)で行つて北口から入るか又は協同太平洋鐵道(Union Pacific R. W.)で公園の西口に向ふのである。園内では總ての個人の經營を禁じて、大抵三十哩餘を隔てた著しい場所々々に一箇所につづゝの旅館と天幕宿泊所とがあるだけである。

私は西入口を撰んで六月二十三日公園の西界の西黄石驛に朝露を踏んで汽車から降りた。此處に降りた客は皆公園見物の人である。驛前の食堂に用意の朝食を認めて居る間に自動車に乗合の組合せが定められた。此邊は海拔六千六百尺程の少しく平地をなした所である。之より東にマヂソン河に添ふて溯ること八哩餘で高臺の間の溪谷に入るのであるが、兩岸は千餘尺の急傾斜でマヂソン高臺となつて居る。進んでマヂソン追分(Madison junction)から道を南に取り火の孔河(Firehole R.)に添ふて進み七千五百尺程の高臺に出た。此の邊までは森林もまだ若く特殊の感興を起さなかつたが、流を溯ること七哩に至つて森林を越えて盛んに白煙の立ち昇るを見て自動車中の一行が皆

驚きと喜びとはしやぎ始めた。我々は今や下の泉窟に近づいたのである。私は嘗て別府に遊んであの方々に散在する地獄を知つて居るので、世間見すの米人等が喧傳する黃石公園の噴泉とても驚く程ではあるまいと高をくくつて居たのであるが、愈々其の下の泉窟に入るに及んで、夫れは公園全體の噴泉の僅かに一部分に過ぎないけれども私の初の見くびりは此所で既に裏切られてしまつた。此所は直徑四哩程の窪地をなして居て此の中に十個程の間歇泉と約七百の熱泉とがあると稱せられて居る見渡す限り至る所から盛んに蒸汽の立ち昇る中に自働車が止まつて一行はこゝでフアウンテン間歇泉 (Fountain Geyser) を見に行つた。道路から二町位の所であつたが其間は全く硅華の沈澱の上を通つて行くのであつて歩く内に靴の裏が溫まつて來た。油斷をすると熱湯の流れに踏み込みそうである。間歇泉は丁度我々の行つた時は噴出の時ではなかつたが、直徑十間の餘もあるかと思はれる孔の中には底知れぬ深さの熱湯が澄み切つた藍色を湛えて居た。四時間乃至六時間で噴出し、高さは二十尺乃至七十五尺に達するが、此公園の中の間歇泉としては此位は敢て珍らしくはない。此泉の誇りは他に比類ない程に湯量の多いことである。

來た時と少し違つた道を取つて巨象の繪具壺 (Mammoth Paint Pots) に來た。自働車は此所に來て待つて居た。路傍に數個の孔が出來て赤褐色の熱泥が沸き返つて居た。同行の米人等は其奇觀に驚嘆して居たが私には單に別府の紺屋地獄や坊主地獄を想起せしむるだけであつた。之より南窪地

の盡くる所にエキセルシオル間歇泉 (Excelsior Geyser) がある。嘗ては其大さに於ても高さに於ても眞に世界第一であつたのであつて、直徑五十尺の噴出孔から二時間乃至四時間毎に高さ三百尺に達する大熱湯柱を噴出して居た。一八八一年から一八八二年にかけては殊に盛んに活動したが、其まゝ一時勢を收めて、一八八八年に至り大噴出をした。公園寫眞技師ヘーンス (F. J. Haynes) は此前後の光景を親しく見届け、殊に一八八八年の大噴出に際しては其壯觀を寫眞に残す事が出来たのである。此噴出の爲めに孔邊の岩石を破壊して盛んに四方に飛ばしたが、それ以來全く噴出を止めてしまつて今は只一個の大熱湯池として靜かに残つて居る。

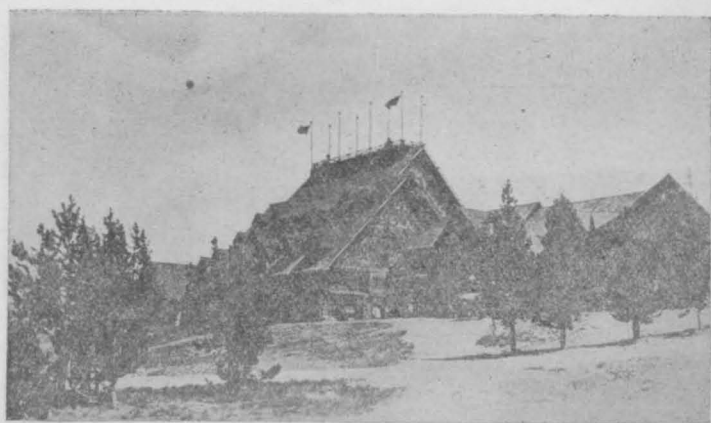
之より南方約五哩に上の泉窪の老實莊 (Old Faithful Inn) がある。目は樂んだが口は尙之に預らない所の人々を乗せた自働車は眞しぐらに上の泉窪を南端に走つて正午過に老實莊に着いた。早朝西黃石驛を出てから此所まで實に三十哩にして始めて一軒の旅宿を見出したのである。丸木造の素朴な建築は如何にも此大自然の中の旅宿たるに適するものである。莊の玄關には數臺の自働車が將に出發の用意をして並んで居た。昨日着いた人々が今晝食をすまして出發せんとする所であつた。入れ代つて我々は直ちに宿帳に附いて今夜の寢室を取つた。莊の入口には、老實泉 (Old Faithful Geyser) の次の噴出は零時四十五分と揭示が出た。莊の東二町が即ち其の有名な間歇泉の位置である。私は直に寫眞機を携へて行つて見たが最早此處の孤獨なる旅館と天幕との中の總ての人々が集

まつて危険のなさそうな場所から何よりの土産話の種を見落すまいと熱心に待つて居た。若い冒險

家の少數が噴出前の孔口に近づかうとして居たが、まだ豫告の時までに五分程あつたので私も恐るゝ之に従つた。

孔口は硅華で僅かに丘狀になつた中央に直徑五尺程に開いて居て中には澄んだ熱湯が沸え返つて居たが、ごろ／＼といふ音が次第に烈しくなる様であつたから急いで遠く退いた。やがて立ち昇る蒸汽の量が増し湯が孔口から溢れ出ると間もなく、非常な勢で一大湯柱を噴き上げた。豫報の間と殆んど違はなかつた。湯の高さは百五十尺、四分間で止んだ。此の頃は六十五分毎に噴出して居たが、一般に冬期に雪の深かつた後には五十五分位、雪の少なかつた後では八十五分位にも延びるといはれて居る。

晝食をすまずと案内につれられて河向の噴泉見物に出かけた。此河は火の孔河の上流であるが、其兩岸殊に西岸約二哩の間は全く足を踏み入れるも危険な程の湧泉で、全部が硅華からなつた土地である。立ち入れ



第一圖 老實莊

ば此の如く危険境であるが、遠く之を望めば立ち昇る白煙が濃緑の森を背景とし前には清鮮なる流

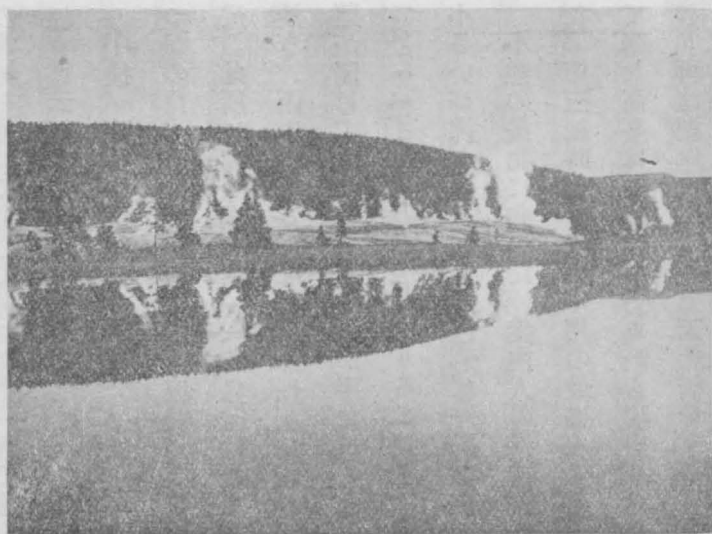


第 二 圖 老 實 間 歇 泉

れに映じて俗塵を脱した太平境なのである。間歇泉は二十四個を數へるが、其最大なるは巨人泉 (Giant Geyser) である。此間歇泉は七日乃至十二日毎に噴出するのであるが、丁度我々は其噴出時に行き合せて天下の偉觀を見る事が出来た。噴出は約一時間もつゞくのであつて、湯柱の高さは二百尺から二百五十尺に達した。巨婦泉 (Giantess Geyser) も亦其偉觀に於て僅かに前者に一步を譲るのみであるが、丁度休止の時で見える事が出来なかつた。間歇泉の内には硅華が其孔邊に高く堆積して奇觀を呈するものが少なくない城廓泉 (Castle Geyser) は其最著しいものである。間歇泉でないものは大抵皆澄み切つた熱湯を湛えて、四邊には最も巧な鑿で彫み最も勝れた手で彩つても尙及ばぬ美さに沈澱した硅華が咲き誇つて居る。

飽きる程噴泉を見まわつて旅館に歸つて夕食をした。今日見物中に日本人と思つて話しかけた朝

鮮の閔君と卓を共にした。食堂にはウイスクンシン大學で勉強して居る若い織田君が季節の間を働



第三圖 火の孔に噴る泉

きに來たといつて居た。武者小路氏の従弟だとか
食事をすまして大廣間に出てくつろいだ。音樂に
合せて旅着のまゝでもう舞踏が始まつて居たが、
晝間から知合になつた紐育の若いL氏夫婦は踊り
ながら私の前を通る毎に微笑した。一切りになつ
た時に玉蜀黍の煎つたのを持つて來て呉れた。

二日目は晝食をして黃石湖へと立つ筈である。

朝早く起きて黑砂泉 (Black Sand Spring) を見に
出かけた。冷々とした高原の朝風が氣持よかつた
誰よりも早いと思つたが一人の婦人の歸つて來る
のに遇つた。黑砂泉は見つからないと云つた。併
し折角來たからと思つて尙進んでエメラルト泉群
(Emerald Spring Group) に出た。此邊に一つの小

い間歇泉朝榮泉 (Morning Glory Geyser) があつて其様に立つて居ると後から一家族連れの人々

が來た。其内の若い娘が近寄つて來て寫眞を撮つてあげようと云ふから、其機械でかと思つたら其の機械を持つて寫して呉れた。一人で旅をするに自分の寫眞を風景の中に残す事が出来ないでせうからと云つてさつさへ行つてしまつた。黒砂泉は遂に見ないで歸つた。

午後一時半に又前日の乗合で出發した。森の中には雪が方々に残つて居た。五日程前に吹雪があつたのだ。道は緩傾斜の上り坂で、南行四哩、更に東行四哩で分水嶺に達した。海拔八千二百四十尺。此所にイサ湖 (Isa L.) と名づけた小さい池があつて、東に落ちる水は南を廻つて西方太平洋に注ぎ、西に落ちる水は北をまわりメキシコ灣に注ぐのである。少しく下つて森林を出ると南方に眺望が開けてショウシヨン湖が手に取る様に見えた。再び分水嶺を越えて黃石湖の分れである西拇 (West Thumb) の水邊に下りると湖邊に繪具壺 (Paint Pots) があつて下の泉窪のものよりは少しく小さいが沸き返る泥土の色彩は一層の美しさである。

小憩の後北に向つた。案内人の指すまゝに南を顧みると湖水を隔て、セリダン山が高く聳えて居た。第三紀時代の噴火作用の最盛んであつた頃に南部での活動の中心であつたのである。今迄通つて來た高臺は其時代に方々から噴出した熔岩からなつて居る。西拇を離れて松林の繁つた高臺を横ぎり再び湖岸に出る邊で天然橋を左手に見ながら進んで湖畔館 (Lake Hotel) に着いたのは五時頃であつた。老實莊からこゝまでは三十六哩である。

旅館は湖水の北端黃石河の發する所に近い。湖水面は海拔七千七百四十尺である。小舟に白帆を張るもの湖岸に釣糸を垂るゝもの、昨夜の宿泊とは違つて極めてのどかである。湖水の東には遠くアブラムスカ連山 (Abraska Mountain Range) を臨む。白堊紀末の造山作用で隆起したものである。夕暮に誘はれて熊を見に出かけた。旅館の後方森を少しく開いた所に料理の残りを捨てゝやると夕暮に之を喰べに出て來るのである。漸く公園が開かれたばかりなので熊は出て來ないかも知れないといつて居たが、それでも初めに二匹だけ森の中に居たのを見た人もあつたが、見物が騒いだ爲めに逃げて我々は見なかつた。

此所は静かではあるが珍らしいものもないので夕方着いて翌朝は九時頃出發した。次の峡谷館 (Cany n Hotel) までは僅かに十五哩である。途中は黃石河の西岸に添ふて行くので、昨日の道とは違い清鮮の氣分に充ちて居た。路傍に泥泉があつたけれども最早誰も珍らしがらない様になつた。正午前に峡谷の始まる少し上の方で河を東に渡つて美術家突出 (Artist Point) に着いた。自働車から下りて石段を八九段上ると急に眼界が開けて思ひもかけぬ景色が目前に擴げられた。足下は非常に急に削り下げられた深溪で、其遙なる底に當つて河流が非常に小さく見えた。兩岸壁は遠く連つて赤茶色黃青等の色の層が交錯して居る。後にベデカアの案内記を見ると、恰も虹が空から下りて岩の上にかゝつた様だと形容してあつた。第三紀に噴出して高臺を作つた流紋岩が地下から上つて

來る噴泉の分解作用を受けて變化したもので、其跡をたどつて浸蝕作用が進んで此峽谷を作つたのである。谷の深さは此の邊で六百尺、上流を見渡せば下の瀧 (Lower Fall) が高さ三百尺の懸崖にかゝり、高さ百九尺の上の瀧 (Upper Fall) は隠れて姿を見せぬ。峽谷は之より始まるので北方下流に至つて益々深く千二百尺に及んで居る。

對岸の峽谷館は小高い所にあつた。東京の帝國ホテルを想起させる様な稍や低い落ち着いた建物で、内部の裝飾なども東洋風な所が多く加はつて居た。晝食後 L 夫婦 B 夫婦と共に魚釣に行つたが有名な鮎は一尾も釣れないで一同大笑をした。岸に設けた非常に高い階段を下つて上の瀧の下に下りて見た。其階段には何所でも同じと見えて年月日だの名前などを不器用に刻み込んであつた。同行の B 氏は私を顧みて、世の馬鹿者が至る所に自分の馬鹿を廣告して歩くといつて苦笑した。

此日愈々熊を見る事が出來た。旅館から五六町、森を控えた草原の手前にはもう大勢の見物人が半ば恐怖の爲めに靜肅に集まつて居た。暮れかけた森の中から三匹の熊がためらひながら出て來て草原の食餌をあさつた。大熊が又一匹出て前のを追ひのけてしまつた。小熊を三匹つれた母熊が左手の林の中から出て來たが、小熊は後足で立ちあがつてふざけたり、母熊に飛びついたりした。我々の傍には三人の看守が實彈をこめた銃を構へて萬一に備へた。見物人が一人も居なくなるまではこうして居るのだと云つて居た。併しながら之が實際上必要であつた例は未だ嘗てないのである。

翌朝は峡谷の西岸を神韻突出 (Inspiration Point) に行つて今一度峡谷の壯麗を味つた。昨日の美術家突出よりも遙かに立派な眺望である。削り残された岩柱は數百尺もある様に見えて、其頂上は驚の爲めの安全なる棲家となり、巢の中に雛の動いて居るのなども岸から見えた。附近の林の中には

氷河の跡を示す直徑二十尺位の花崗岩塊が残されて居る。此附近は全く新しい噴出の流紋岩の高臺であつて花崗岩のある所までは最も近くて二十哩もある。氷河の力で此の花崗岩の大塊が二十哩を遠しとせすして運ばれたのである。

午後巨象溫泉に向つて出發した。順路は東まわりで南方ウオッシュユバアン山から塔の瀧 (Tower Fall) を經て行くのであるが、今日六月二十六日に此の道は尙雪に閉されて通れないので西廻りをしてノオリス泉窪を通つて行



熊の飼放 圖四第

く事になつた。東廻の方が遙に見たいものが多いのである。第一は北部噴火作用の中心であつたウ



第五圖 保護の鹿

オツシユバアン山で、海拔一萬四百尺の頂上まで自動車で樂に上れる様になつて居る。此山を北に下つて塔の瀧から西一哩には硅化木がある。併し其更に大仕掛けのものを見るには更に東方六哩を行くので、其所には高さ百餘尺の懸崖に十三層に渡つた化石林の層が残つて居る。此の如き大切な點を見落さねばならぬのは残念であつたが、六月末に雪の爲めに道を塞がれたといふ事に強いて興味を覺えながら寧ろ退屈なる西廻三十一哩の道をひた走りに走つてまだ日の高い内に巨象館 (Mammoth Hotel) に着いた。

此所は公園の事務所のある所で、其外看守長、看守人、人夫等の住宅、教會、病院、陳列館、寫真館等も出來て居た。皆官營である。私は直ちに事務所に行つて地圖、公園學術叢書等を買つて來た。歸ると旅館の前には知合のL氏B氏などが私を待つて居て、直ちに同行して湯華段丘を見に行つた。此處の溫泉は炭酸泉であつて間歇泉を作らず其代りに炭酸鹽が沈澱して至る所、段丘を伴つて居るのである。旅館のある邊は低い平地で前は立派な芝生になつて居るが所々に石灰孔が

出來て居た。此廣場の西南一哩の間に渡つて全部湯華段丘である。其形と色彩とは到底人力では出



第六圖 湯華の枯る林

來ない美しさの段丘が無數に出來て其一つ／＼には小さい池の様に熱湯を湛えて居る。段丘の裾には溢れた湯が流れて湯華の區堰を擴げて行くので、近頃まで繁茂して居たかと思はれる立木の林が其まゝ枯れて次第に湯華に埋められて行く経過を我々に示して居る。段丘は重なり重なつて下から二百尺の高さに達して居る。此頂上の後方には所々に噴氣孔があつて炭酸瓦酸の爲めに危険であるが、只一つ惡魔の臺所(Devil's Kitchen)と稱するものには梯子が設けてあつて、孔の中に下りて行く事が出来る。

園内で過す最後の夜が明けた。昨夜聞いて置たので早く水牛を見に出かけた。ボストンの茶商夫婦が追ひ付いて來て日本の茶は我々に適しないなど、けなしたが、やがて休息せうといつて路傍の石に腰かけてチョコレートを出して呉れた。ボストンに來たら寄つて呉れといつて名刺など呉れた。一哩で水牛を見る所に着いた。我

々は最も早かつたので他の人々の來るのを待ち合せて居る内に看守が馬で山の方に驅けて行つて水牛の群を連れて來て呉れた。今年は二十頭しか見えないと云つて居た。塔の瀧の東方五哩の邊には四百頭位居るそうである。

晝食後西出口に向つた。もう見物にも飽きたのであるが昨日見なかつた黒耀石崖(Obsidian Cliff)だけは注意して見た。道路にかぶさつて二百五十尺の懸崖をなして居る。亞米利加印度人が矢の根の材料採集所として最も大切にした所である。道を隔てゝ河狸湖(Beaver L.)がある。河狸が棲を作つて堰堤をなし河流を堰き止めて此の湖水が出來たのである。之からノウリス泉窪で又多くの噴泉を見た。此所の噴泉の特色は絶えず其噴出の場所をかへ噴出の模様を變ずる事とされて居る。又浴槽(Bath)の名で知られて居るものは或時期の間のみ間歇泉であつて他の時期には只の溫泉であるといふ氣儘ものである。餘りに多く見た後では此ノウリス噴泉も最早我々の心を引き止むるには足らなかつたので、自働車は直ちに進んでギツボン河の峽谷に添ふて下り、西黄石驛に出た。我々は又驛前の食堂で最後の晚餐を認めて汽車に乗つた。五日間を共にした同じ自働車の乗合が此汽車に乗つて明朝は大抵別れゝになるのである。私は明朝鹹湖市(Salt Lake City)に降りる筈である。汽車中で公園事務所で買つた本を出して公園の名残を惜んだ。其中にはいろいろの面白い話やら公園の規則などが書いてあつた。

白人にして初めて此地に足を入れたのはコルター (Colin Coulter) で一八〇七年の事である。併し其間歇泉や熱泉の話を聖路易でした時には誰も信じなかつた。ブリッヂャア (Games Bridger) の此の地に入つたのは一八三〇年が始めである。彼の話は面白過ぎて信ぜられなかつた。例へばこゝにふ調子である。自分の野營から遠く離れて大きな山が垂直に聳えて居た。野營で大音を發すると此山で山彦となつて再び聞えるに六時間を要した。夜寝る時に起きよゝと奴鳴つて置くと朝丁度その山彦が聞えて来る。こんな調子であつた。一八六九年頃から探險隊が行つたが、遂に一八七一年には合衆國地質調査所と陸軍との探險隊を送るに至り、間もなく國營公園に指定せられたのである。併しながら數年間は遊覽者が屢々印度人に襲撃せられた。又狩獵者の爲めにも公園が非常に荒された。幸に政府及一般の努力によつて其自然を保護するに努め、遊覽の設備も整つたのである。

此の公園の中では個人の住居や經營は全然許されて居ない。遊覽客の爲めには小數の旅館と天幕宿泊所と休憩所の設けがあるが、之は特に公園長の許可した組合に委任してある。交通も一定の道を乗合自動車による事になつて居る。團體に加はらぬ個人の遊覽も許されては居るが其の爲めには野營所が指定されて居る。野營は通路から百尺以上を離れるを要し、通路から見える所に洗濯物などを乾す事を禁じてある。

看守人の資格を見ると第一は山火事の消火に堪能なものであつて、第二には園則を犯したものを

よく見つけ出すものである。園則といふ内にも普通の治安規則は勿論であるが、噴泉にいたずらをする事、野生の熊などに餌をやらうとする事、樹木などに樂書をする事なども含まつて居る。園内では狩獵を禁じてある。

顧みるに此廣漠なる區域が眞に國民全體の爲めに最も適當に保存されて、小數の人々に私せられず、又俗惡化しないで居るのを見て、當局及國民の措置に敬服せざるを得なかつた。我國に於ても近來國營公園設置の議が喧しいが、願はくば少數關係者の私利を絶對に排斥して、眞に國營たるを辱めざるものごしたい。國營公園の指定に當つては必ず地質學者、生物學者、保健學者、土木學者等よりなる探險隊を組織して精査を遂ぐ可きである。

圖版第二、第四

本圖版は松山教授の撮影にかゝる右は黃石河浸蝕作用峽谷を作つたのである、谷の深さはこの邊で六百尺上流を見渡せば下の瀧が見え、上の瀧はかくれて見えぬ、左は老實間歇溫泉一一二頁第二圖は將に噴出せんとする所、この圖版は今や二百五十呎の高さに噴騰した瞬寫である、第四版の一は同地亘象溫泉の湯の華壇である